素晴らしき芸者の世界

私の叔父は老舗呉服屋を営み、両親や祖母、叔父、叔母、家族は、剣道、詩吟、茶道、居合道、弓道と日本文化を嗜み、私も叔母の影響で、高校生から茶道をはじめる。幼少期から、日本文化が私の身近にはあった。

留学経験で日本文化への探究心が生まれた私は、大学卒業後、呉服屋や、和装での飲食業をし、花柳界へと足を踏み入れた。

"素晴らしき芸者の世界" と聞いて、眉を顰める人がいることは重々知っている。
実際、仕事を初めて、昔のいろんな話を耳にし、その事実に落ち込むことがあった。
現実に、ある一定の人から向けられる視線に、悔しく思ったこともあった。"嫌な思い"をしたこともあった。誰もが、あの、"別世界"にいいイメージを持っているわけではない。

"花柳界"と呼ばれ、俗世間と線引きされているだけあって、綺麗事ではない別世界がそこにあることを否定もしない。ただ、私は日本文化があんなに輝き、日本文化が嬉しがっている世界を他に見たことがない。

あんな素晴らしい世界が、現代の 2024 年に存在している事実を目の当たりにした衝撃に比べたら、世の偏見などたいしたことないと思えるほど、私にとって、大切な価値のある場所で、まさに、あそこは、日本文化の聖地、聖域だと思った。

若く美しい女性が身にまとう、格の高い訪問着、袋帯は、日本の民族衣装として、誇らしく輝いて見えたし、大切にされている、三味線、小鼓、大鼓、太鼓、篠笛、能管、扇子、などの、和楽器、道具達も彼女たちに扱ってもらえることが嬉しそうに見えた。
茶道の世界や、呉服業界で、私より若く、日本文化の知識も豊富で、着物を真に知り美しく着れて尊敬できる年下、または同年代に出会ったことがなかった。

それは、衰退する日本文化の凝縮図のようで、未来がない、希望がもてないと気をおとし、切磋琢磨できる同志や仲間もいないと、落胆していた。
「確実に衰退していくんだろうなぁ」そんなふうにしか思えなかった、私の日本文化の世界が目の前で逆転してしまった。天地がひっくり返った。ここでは、私より若い女性が、着物しか着ていなく、日本文化にしか触れていない、のだ。五感で感じるもの全てが日本文化なのだ。

春夏秋冬の季節の行事を大切にし、正月には日本かつらを被り、裾を引き、お年賀を配り挨拶回りをし、獅子舞で願掛けをする。春は桜の柄の訪問着で、花見を楽しみ、夏の稽

古の発表会の”浴衣浚い”では、揃いの注染の浴衣に博多帯をし、そして浴衣で屋形船に乗り花火を仰ぎ、御中元を贈りあう、秋は法被をはおり、神輿を担ぎ、氏神をまつり、節分には神社で豆まきする。仕事着は、格の高い訪問着に袋帯、草履を履き、畳の上は五枚こはぜの足袋で歩き、襖は座ってあけ、手をつきお辞儀をし、正座をする。自分より先輩は「お姐さん」と呼び、必ず自分は下座に座る。

私の眼にするもの、触れるものの全てが日本文化なのだ。
こんなにも日本文化が尊重され、大切にされて、継承されている場所があることに心から驚き、嬉しく思った。やっと同志達に出会えたとも思った。
日本中どこを探しても、若く美しい女性達が、こんなに日本を満喫している場所はない。
彼女達が日本文化を守っているとも思えた。
そして、こんなにも生活に日本文化を取り入れている若者が、この現代に、この日本にいることをどれほどの人が知っているのだろうか。

こんな素晴らしい楽しい場所、私が求めていた場所、私のためにある世界を見つけられた、これこそ私のための世界だと、私は今も思っている。

私にとっては、眉を顰められ、軽蔑されてもそれ以上の価値がある仕事だと確信していた。留学経験を得た私には、この場所の価値が誰よりもわかっていたし、いつか辞める時が来ることもわかっていたからこそ、仕事ができる時が、かけがえのない大切な時間だと信じてやってきた。

世間がどう思おうと、日本文化を愛し、芸に真摯に向き合い、プロフェッショナルとして誇りをもって、誠実に仕事をし、精進を重ねる、若く美しい女性達がいることを知ってほしい。

私はすでに現役は退いたが、この場所で仕事をしてきたことを心から誇りに思い、今も日本文化を愛し、真摯に学び続けている。

素晴らしき芸者の世界へ、感謝をこめて。

TMOアドバンス講座　三橋千恵美